

京都大学言語学懇話会
2016年度 発表要旨

例会報告

第 100 回例会

日時・場所 2016 年 4 月 9 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目 「死語から言語変化を推定する」

吉田 和彦 (京都大学)

「京大言語の「文献言語学」の伝統と漢字音：
中世イラン語研究との接点」

吉田 豊 (京都大学)

第 101 回例会

日時・場所 2016 年 7 月 9 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目 「母音をめぐるセデック語音韻史」

落合 いずみ (京都大学)

「フィールド調査から言語の変容をとらえる」

林 範彦 (神戸市外国語大学)

第 102 回例会

日時・場所 2016 年 12 月 10 日(土)13:30-16:45 於文学部校舎第一講義室

発表題目 「カエ方言の記述から浮かび上がるスワヒリ語文法の問題点」

古本 真 (日本学術振興会 PD/大阪大学)

「マア語の 2 変種について—通時的な言語接触と共時的な言語接触」

安部 麻矢 (京都大学)

死語から言語変化を推定する

吉田和彦

話し手が消滅し、文献資料のみを残す死語から、言語変化を推定することは容易ではない。しかしながら、死語の場合であっても、言語学的手法を用いることによって、言語変化を導き出すことは決して不可能ではない。ここでは、その具体的な試みのひとつとして、紀元前 2 千年紀にアナトリアで使用されていたヒッタイト語の場合を考えてみたい。ヒッタイト語は 1915 年に解読されたが、この言語の研究は近年めざましい発展を遂げつつある。この発展をもたらす大きな原動力となっているのは、新資料の追加とともに、ヒッタイト語が記録されている粘土板に関する文献学的な立場からの成果である。以前は粘土板が書かれた時期、およびその粘土板がオリジナルかコピーかの判断は、ほとんどなされていなかった。ところが、近年では字形の変遷などの文献学的根拠や考古学的な根拠に基づいて、テキストを古期、中期、後期ヒッタイト語のそれぞれに時代区分すること、さらにはテキストがオリジナルの粘土板に記録されているのか、あるいは後の時代のコピーかという認定がかなりの程度可能になったのである。

従来の研究では、ヒッタイト語の先史において *t は *i の前で破擦化した結果 -zzi になったが、*d が i の前で破擦化して -zi になるとは考えられていなかった (zz と z は子音の強さ (長さ) の違いを表す)。しかしながら、古期ヒッタイト語には *ú-e-mi-zi* ‘finds’、*i-e-zi* ‘does’、*pí-ḫu-te-zi* ‘brings’、*zi-in-ni-z[i]* ‘finishes’、*du-ua-ar-ni-zi* ‘breaks’ という 5 つの貴重な動詞形式が記録されていることが明らかになった。これらに共通してみられるシングルの -z は非言語学的要因に基づくとは考えられない。さらに、比較言語学的視点に立つならば、これらのいずれの形式についても、アナトリア祖語の時期にアクセントのある長母音の後、あるいはアクセントのない短母音の後で生じた子音の弱化規則 (*t > *d) が適用される条件を満たしている。*ú-e-mi-zi* < **au-h₁ém-je-ti*、*i-e-zi* < **ǵǵé-ti* < **ǵǵéh₁-ti*、*pí-ḫu-te-zi* < **pé-h₂u-dǵé-ti* < **pé-h₂(e)u-dhéh₁-ti*、*zi-in-ni-z[i]* < **tinǵé-ti* < **tinéh₁-ti*、*du-ua-ar-ni-zi* < **dhur-nǵé-ti* < **dhur-né-h₁-ti*。したがって、これらの 5 つの形式は、ヒッタイト語の先史において **-ti* ではなく、**-di* という語尾によって特徴づけられていたことが分かる。すなわち、*d が i の前で破擦化して -zi になるという言語変化を反映しているのである。

歴史言語学において、文献学的考察が重要な役割を果たすことは言うまでもない。このことは、近年著しく発展しているヒッタイト語研究においても如実に表れているのである。

(よしだかずひこ)

京大言語の「文献言語学」の伝統と漢字音：中世イラン語研究との接点

吉田 豊

この発表では、京都大学文学部言語学専修の偉大な先人である、故西田龍雄教授と故庄垣内正弘教授、とりわけ庄垣内教授が常々標榜しておられた「文献言語学」とはどのようなものであるのかについて、発表者の理解を述べた。それによれば、「文献言語学」とは、フィールド言語学者がフィールドに赴いて未調査の言語のデータを収集し分析するのと同じように、未解読の文献を調査・研究することによって新しい言語データを回収し、さらにそれに対して言語学的分析を加えるものである。新しいデータを加えるという点で、すでに知られている文献言語を研究して、言語の歴史を再構築する歴史言語学とは似て非なるものである。

二人の先人はまた、西夏語とウイグル語というアジアの文献言語を研究し、漢字音に関する研究を常に利用してきた。西田先生の華夷訳語研究や庄垣内先生のウイグル字音研究はその典型であり、この分野では常に世界をリードしてこられたのであった。本発表の後半では、この手法を中世イラン語に適用して、発表者が行ってきた、漢字で音写された中世イラン語の研究がどのようなものかを、主に漢訳されたマニ教文献を例にして解説した。特に、2009年以降中国の福建省で見つかっている、清朝時代末期から中華民国時代にかけて、ここにいた「隠れマニ教徒」が伝承してきた科儀書に、中世イラン語のマニ教賛歌の漢字音写が残されていることを明らかにした上で、対応する賛歌が、1200年以上も前の敦煌文献にも見えていること、しかし音写のシステムは、敦煌と福建では異なること、音写の基礎となる漢字音は福建の資料の方が古いことなどを指摘した。

(よしだ ゆたか)

母音をめぐるセデック語音韻史

落合 いずみ

本発表の目的はセデック語二方言の比較によりセデック祖語の母音体系を再建し、祖語から各方言への改新を説明することである。発表の構成は、パラソ方言を中心とした (i) 二重母音の考察、(ii) 歴史的重複語の考察、(iii) 語末 *uy* の交替、に関わるこれまでの発表 3 本から成る。結論としての母音をめぐるセデック語音韻史を表に挙げる。改新は太字で示す。囲みは現時点の観察によるものであるが、今後精細な調査を要する箇所である。

パラソ方言		セデック祖語	タロコ方言	
	a	a		a
	i	i		i
	u	u		u
e (次末)	u (語末)	ə	ə (次末)	u (語末)
o (次末)	o (語末)	aw		aw
e (次末)	e (語末)	ay		ay
ey (次末)	uy (語末)	əy	iy (次末)	uy (語末)
	uy	uy		uy

(i) 1920 年代のパラソ方言には語末の *aw* と *ay* が保たれていた。(ii) パラソ方言の歴史的重複語の中で最終音節に *u* を持つものは、接尾辞付加語 *u* のにもままの語と、*e* に交替する語がある (例: *gusegus* 「磨く」*gusuges-i* 「磨け」)。語末 *u* ~ 次末 *e* 交替型の母音は通時的に *u* には遡れない。音配列規則から *e* にも遡れない。語末の *e* は *ay* に遡るためである。残された候補が *ə* である。これは強勢位置の次末音節では強化を受けて *e* になり、語末では *u* に変わった。(iii) 同様の変化は、語末 *uy* にもみられる。語末に *uy* を持つ語に接尾辞を付加した場合、これが *uy* のままの語と、*ey* に交替する語がある。後者の場合は、通時的に *əy* に遡る。接尾辞付加により次末に移ると、強勢位置での強化により *ey* になった。語末では曖昧母音を保てずに *uy* に変わった。

(おちあい いずみ)

フィールド調査から言語の変容をとらえる

林 範彦

フィールド言語学の目標は対象言語の共時態についての包括的な記述であろう。通時的な研究は共時的な記述を混乱させるなどの障害を与える要素としてみなされやすい。しかし、一方で無文字言語の研究では他言語との歴史的な関係や言語構造を考える上でも通時的観点はむしろ有益である。ここでは発表者のチベット・ビルマ諸語の調査から述べる。

例えば、チベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支の一言語であるアカ語は Lewis (2008) によれば /sm/ 「3」、/ca, hm/ 「毛」のように母音のない音節を許す語彙の存在を示している。確かにタイのチェンライ県で調査すると、いずれも母音を持たないことがわかる。一方で、ラオス北部のアカ語の方言を調べれば、アカ・ブリ語は鼻音が音節主核に立つが、その他の方言では少なくとも「3」については /sup35/ のように母音を音節主核とする。これらの共時的な位置づけや通時的な発展は、フィールドデータの採集と比較研究によってより深い理解が得られる。

さらに、チノ語悠楽方言・補遠方言 [中国雲南省; チベット・ビルマ系] の介音の推移や摩擦音の発展についても検討した。これらから各言語の音節要素の発展段階を推定した。例えば、介音については *Pl > Pr > Pj > P (P は無声両唇閉鎖音) の 4 段階が存在する。チノ語悠楽方言は Pr を保持するが、補遠方言やアカ・ブリ語では Pj まで変化が進んでいる。このため、介音についてはチノ語悠楽方言が他言語に比して古態性を持つと評価できる。同様の分析を進めれば、各言語の発展段階を総合的に評価できるようになると考えられる。

最後に形容詞の発展について、チノ語悠楽方言・補遠方言、アカ・ブリ語、ロロ・ポ語の 4 言語の一次資料を比較した。これらの比較からロロ・ビルマ祖語の形容詞は語根のみが再建される。チノ語悠楽方言の形容詞は、語根に {a-}/ {la-}/ {jo-} の 3 種の接頭辞が付加される。この形容詞の発展過程においては、独自に {a-}+[語根] を派生したのに対して、jo-+[語根] は近隣のアカ語から借用されたものであると推定できる。

(はやし のりひこ)

カエ方言の記述から浮かび上がるスワヒリ語文法の問題点 —語基盤モデルと PFM に基づく動詞語幹の分析—

古本 真

本発表では、スワヒリ語カエ方言における、動詞語幹末の母音部分の形態論的分析について議論した。この部分は、バントゥ諸語研究では一般に末母音 (final vowel) と呼ばれ、形態素とみなされている。しかし、末母音を形態素とした場合、以下のような問題が生じる。

- 問題 1：不規則な形式の語幹形成を説明するアドホックな規則を仮定する必要がある。
- 問題 2：無意味形態素を認めざるを得なくなる。
- 問題 3：末母音が欠如している動詞の屈折機能の獲得を別途説明する必要がある。
- 問題 4：末母音の形式と機能の齟齬を説明する必要がある。

上記の問題を踏まえ、本発表では、末母音を形態素とはみなさない分析を提示した。まず、語幹形成については、語基盤モデル (word-based model) (cf. Bochner 1993, Haspelmath and Sims 2010) の考え方をういて説明した。この枠組みを用いることで、規則的な形式の語形であっても、末母音まで含んだ語幹全体がレキシコンに登録されていると考えられ、問題 1 と問題 2 が回避される。なお、語基盤モデルでは、レキシコンに登録されている語形が膨大な数に上る、新語形成を説明する必要があるという課題が残るが、屈折による語形同士の関係は規則によって結びついている、レキシコンには、具体的な語形だけでなく、その具体的な語形に基づく抽象な形態パターンも登録されていると仮定することにより、この二つの問題は解決される。

そして、語幹の分布と接頭辞付加について説明するために Paradigm Function Morphology (PFM) (Stump 2001) を導入した。PFM では、機能を有する形態素を組み合わせることによってではなく、形態統語素性が指定されると、その形態統語素性と屈折形式とを関係づける規則によって、具体的な実現形が形成されるということを前提としている。PFM では語幹形成と活用形形成を説明するために、異なる規則を仮定しており、語基盤モデルの考えと大きな矛盾をきたすことなく、接頭辞付加まで含めた活用形形成を説明することができる。PFM の考え方をういることにより、問題 3 と問題 4 は回避される。

(ふるもと まこと)

マア語の 2 変種について—通時的な接触・共時的な接触—

安部 麻矢

本発表は、タンザニア北東部、タンガ州の西ウサンバラ山塊一帯に居住するマア (Ma'a; Mbugu とも) の人々の民族語であるマア語のふたつの変種 (内マア語と外マア語) を取り上げた。内マア語は、19 世紀末より周辺のパントゥ系言語とは異なる構造を持つことが知られており、多くのパントゥ諸語に見られる名詞クラスと動詞類接頭辞との一致 (agreement) システムを持ちながら、非パントゥ系起源であると見られる語彙を多く有することから、言語接触により成立したと考えられ、20 世紀後半からは、言語接触の研究領域でしばしば取り上げられ、論じられてきた。一方の外マア語は、パントゥ諸語のひとつであるパレ語 (スワヒリ語で Kipare、G.22) と非常に類似しているといわれてきた言語である。

まず、先行研究を概観し、研究の不足点・疑問点を指摘した。次にふたつの変種の文法構造を比較し、名詞クラスの接頭辞や動詞類接頭辞などの形式はほぼ同一で、差異は主に語彙の面にみられることをふたつの変種の例文を提示しながら示した。言語の構造からは、ふたつの言語は異なる文法を持っているとはいえない。次にふたつの変種のマアのコミュニティにおける使用の実際から、それぞれに母語話者がおり、社会的にはそれぞれ別個の言語として振る舞っていることを示した。最後に本年 8 月に実施した現地調査で明らかになったことの報告もおこなったと推定できる。

(あべ まや)

『京都大学言語学研究』35号正誤表

256 ページ

(正) 現地調査で明らかになったことの報告もおこなった。

(誤) 現地調査で明らかになったことの報告もおこなったと推定できる。